



Mrs WadmanとTobyの恋愛戦争 : Tristram Shandyにおけるsexualityの研究

著者	石井 重光
雑誌名	主流
号	53
ページ	35-53
発行年	1992-02-25
権利	同志社大学英文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000015093

Mrs Wadman と Toby の恋愛戦争

— *Tristram Shandy* における sexuality の研究 —

石 井 重 光

本稿¹では、Toby の Mrs Wadman への求婚劇と sexuality を分析し、Sterne がそれをどう扱い、どのように考えたかを論じてみたい。

I Mrs Wadman は何歳なのか？

最初に Mrs Wadman の年齢の問題を解決することから始めよう。それは後にわかるように彼女の Toby への求愛行動を理解するうえで必要不可欠な鍵の一つである。長い未亡人期間も高年齢も、一般的に未亡人の再婚には不利に作用する。

Tristram は語りの中に実際の日付や、それを確定する歴史事件を配し、Theodore Baird が示すように、それはいくつかの錯誤を含むものの、Sterne によって綿密に調整されている²。しかし、Tristram は登場人物の年齢にはほとんど言及しない。Mrs Wadman の年齢を推定するには、18世紀イギリス社会の歴史人口動態学 (demography) の成果が本文中の不十分な情報を補ってくれる。

Toby が戦傷のため兄の家の寝室に閉じ込められて4年目(1701年)のある晩、Trim は Shandy Hall の bowling green でおこなう包囲戦ゲームを描いてみせ、Toby の想像力に火をつける。翌日の午後、2人はわずかな荷物を携えて城造りを楽しむ為に密かに Shandy Hall へと出発する。しかし、そこにはまだ家具がなく、Le Fever が死んだ宿屋もまだなかったので、Toby は Mrs Wadman の家でベッドの提供を受けねばならなかった。その当時の彼女は “the many bleak and decemberly nights of a seven years

widowhood” (441)³ を過ごしていたと語られている。つまり彼女は夫と1694年に死別している。

女性の当時の法律上の結婚年齢は12歳だったが、実際の結婚は階級によって違った。さて Walter は、Mrs Wadman が、現在住んでいる家の “tenant for life” (502) にすぎないと妻に教えている。しかし彼女は “her own goods and chattels” (441) を所有しており、Mrs Bridget との経済的に独立した未亡人生活を可能にする寡婦財産または年金等を持っていたことは間違いのない。Toby が彼女の家に泊まった二晩目に、彼女は結婚契約書を “great devotion” (442) をもって読んでいる。これは、再婚しても夫から遺贈された財産を失わないことを彼女は確かめたのだと考えられる⁴。彼女は亡夫の財産を管理してきたのだと思われる。また、“bleak and decemberly nights” は彼女が性的奉仕と引替に財政的援助や庇護を手に入れる愛人ではなかったことを示している。たとえ上流階級の未亡人でも、収入の手だてがなければ、家庭教師の仕事をするか愛人にならなければならなかった。夫の死後、彼女が経済的に安定した生活を送ったことは疑う余地がなく、以上のことから彼女は裕福な家庭の出身で紳士と結婚したと考えられる。

歴史人口動態学によるとエリート階級⁵の娘は17世紀末には平均22歳で結婚していた⁶。さて彼女は、Toby と初めて会って12年ばかりの後⁷、つまり1713年に Toby に恋の攻撃を仕掛けようと決心する。他方 Toby は、自身が攻撃を受けているとも知らずに Trim を伴ない彼女の家を訪れ、“he was in love” (525) と告白する⁸。それを受けて彼女は結婚の苦勞と不安、さらに出産と育児の心痛について、

—As for children . . . though a principal end perhaps of the institution, and the natural wish, I suppose, of every parent—yet do not we all find, they are certain sorrows, and very uncertain comforts? (526)

と語る。彼女は妊娠、出産、育児の母親としてのサイクルに対して明確な嫌

悪を表明している。彼女は妊娠と出産が危険であることを知っていて、望まない妊娠を恐れたのである。18世紀の高い出生率は子供と母親の高い死亡率によって相殺され、“Childbirth was ten times as dangerous as venereal disease”⁹と言われている。彼女は結婚生活と子育てを分けて考えようとする。それは、彼女がまだ子供を生める年齢であることの証拠でもある。

歴史人口動態学によれば、1750年以前には女性が最後の子供を生み終える年齢の平均は38歳であり、¹⁰閉経は40歳頃である。¹¹1713年に彼女が40歳頃であったと仮定すると、逆算により彼女が夫を亡くしたのは21歳頃ということになる。そうすると彼女は10代の後半で結婚したことになり、エリート階級の娘の結婚平均年齢よりずっと若い。しかし彼女が初めてTobyと出会った時（1701年、28歳頃）の彼女の描写は、彼女の年齢についての我々の推定の正しさを支持している。彼女はその年、Tristramにより“*a perfect woman*”（440）と語られる。20代終わりと30歳代初めは女性一般にとって女らしさの頂点であった。“*a perfect woman*”とは、美しく、成熟し、魅力的で、あまりに女っぽいことを意味する。若くしての結婚と短い結婚歴のおかげで、彼女は“*a perfect woman*”として魅力を保ち、未亡人という印象を与えなかったのである。これらのことから、1713年、Tobyとの恋愛戦争が起きた時、Mrs Wadmanは40歳頃であったと考えてよいであろう。さて、彼女の年齢についての検討をさらに進める前にTobyの年齢を推定しておきたい。1718年WalterがTristramを得た時、彼はちょうど50歳代半ばであったと語られている。よって、1713年にはTobyはまだ50歳を越えていなかったということになる。このことは彼がMrs Wadmanよりせいぜい10歳程年上であったということである。

II Mrs Wadman の再婚への熱意

TobyはMrs Wadmanの年齢についても、また年齢の差についても何一つ意見を述べず、彼女の年齢が結婚の障害になるとは考えていない。むしろ

結婚には釣り合っている年齢である。Toby のように、紳士階級の次男以下で結婚しない男性は多く、50歳を過ぎても独身のままのエリート男性の割合は18世紀初頭で21パーセントもあった¹²。しかし教会やモラリストは、長い又は一生にわたる独身生活には賛成せず、年をとってから結婚することもイギリスでは珍しくなかった。だから Toby にとって、Mrs Wadman との結婚は望ましいものであり、彼にとって彼女の年齢は決して問題でない。年を意識しなければいけないのは彼女の方である。

未亡人と未婚婦人 (spinster) の違いの一つは、両者の自由の程度の差である。未亡人は未婚婦人よりずっと大人であると認められ、寛容な態度で迎えられる。未亡人は生活に対する制限がずっと少なく、恋愛に対する障害はなく、再婚の自由もあった。しかし、未亡人が再婚するのは易しくはなかった。再婚自体は一般的であったが、それは出産時に妻を亡くし、残された子供を育て家庭を守るために、寡夫が再婚するものであった。Mrs Wadman は Toby に最初に会った時28歳頃であり、それは再婚の大きな機会であった、しかしその時、Toby は包囲戦ゲームに心を奪われていた。彼女にはスピードが肝要であった。未亡人の再婚の機会は年と共に急激に減っていく。彼女は Toby と再婚するために真剣でなければならない。彼女は包囲戦に心を奪われている Toby の気を引くため魅惑術を必要とする。指の "skirmishing" (448) があった Bouchain の地図について、Tristram は叔父への思いを込めて語っている。このことから、Marlborough が Bouchain 包囲戦に勝利した1711年8月頃に、彼女の指による誘惑は始まったと考えられる。しかし、彼はこの誘惑にはかからなかった。それは "his centre" (448)、つまり心には何の効果も及ぼさない。彼を驚かせたのは肉体的接触だけであり、彼の口について出た言葉は "The duce take it!" (448) である。1713年、the treaty of Utrecht により包囲戦ゲームの機会がなくなった時、彼女に最後の機会が巡ってくる。彼女は、Toby の掛けているベンチの隅に体を押し込んで目に入った砂か塵を探してくれるように頼む。Tristram は彼女の目の魅惑的な

力を伝統的な表現を使って描いているが、彼女の意識的な眼差しはうまく彼の心を掴み、彼の受けた傷は、“not a skin-deep-wound—but that it had gone to his heart” (468) であった。

彼女の魅惑術は彼女の好色を証明する材料を提供してきた。しかし、性的言葉遊び、性的仄めかしに満ちた *Tristram Shandy* を読む時、不注意に Sterne の導きに従うと、読者は作者が仕掛けた淫らな罠に捕まってしまう。なるほど彼女の魅惑術のうわべには行儀本 (conduct book) の伝統的な主題である上品さもつつましさも見いだせない。しかし、Mrs Wadman は自由に恋をする機会を持っており、性に無知であるふりを装ってはいない。行儀本や文芸の伝統は上流社会の女性に高潔、貞節そして従順であることを説き続けてきた。その一方で、説教や手引書では、モラリストや説教師が若い女性に良き夫を得るための魅惑術を勧めていた。結婚相手を選ぶ自由意志が18世紀になって次第に社会に受け入れられるようになると、魅惑術は女性にとってずっと重要になってくる。ましてや未亡人の Mrs Wadman にとってはなおさらである。ところで彼女は魅惑術の必要性を認識してはいたが、Pamela とは違って自分のセックス・アピールを意識してはいない。重要な点は、彼女がもはや若くはなく、時間が残されていなかったということである。長い未亡人期間は読者のなかに彼女の好色なイメージを作り上げる要素にはなるが、*Tristram Shandy* の登場人物は誰ひとり彼女を好色だと考えてはいない。好色のラベルを貼られるべきは読者の心性なのである。

—And possibly, gentle reader, with such a temptation—so wouldst thou: For never did thy eyes behold, or thy concupiscence covet any thing in this world, more concupiscible than widow *Wadman*. (375)

と *Tristram* は微妙な言い回しで語る。Mrs Wadman は性的に積極的なのではなく、再婚に積極的なのである。

Ⅲ Mrs Wadman の真剣

Mrs Wadman の長い未亡人期間は読者に女性の sexuality についての伝統的な概念を呼び起こす。18世紀では、女性の一生は娘、妻、未亡人の3期に分けて説明され、未亡人時代は “the most wretched stage of a woman’s life”¹³ だと性格づけられていた。彼女が夫と死別したのは21歳頃であったが、一般的に若い未亡人の強い性欲は新しい関係によって満たされることを望んでいると考えられた。彼女の夫婦生活は、 “[her] first husband was all his time afflicted with a Sciatica” (528) なので、無に等しがったといえる。Tristram が言及する有名な性の手引書 *Aristotle’s Masterpiece* では、未亡人は顔色が緑や赤茶けた色になり、快楽の習慣を静めなければいけないのに、その情欲を容易く静めることができないと言われている¹⁴。

未亡人ということで Mrs Wadman は好色と結び付けられてしまうが、ここで18世紀のイギリスにおける sexuality についての考え方を概観してみたい。18世紀は性の悦びの新しい時代であるという見解と、それとは全く逆の、性は女性にとって依然として義務であり悦びではないという見解がある。Sterne は女性の sexuality と男性の不能を強調する傾向があるので、私達は両方の見解に等しく心を配るのが有益である。

Tristram が Mrs Wadman を “a perfect woman” と言う時、彼女は “a daughter of Eve” (440) と描写される。Eve はキリスト教文化の中では墮落した天性の象徴であり、その Eve の直系である女性は理性に欠け性的に貪欲であると考えられてきた。肉欲の罪という表現により sexuality は罪であると考えられ、女性はすぐさま性と反抗に動機づけられると思われた。よって、伝統的な Eve のイメージと本文中の “a daughter of Eve” と “a perfect woman” の並置は、Mrs Wadman に淫乱と娼婦のイメージを与える。“It is good for a man not to touch a woman.”¹⁵ と語ったのは St Paul であった。男性は伝統的に女性を淫らな欲望の火山とみなし、男性とは違って性欲を抑

えられないと考えた。

古代ギリシャの医学書の中に、“hysteria”という言葉で、性的没交渉と不順な sexuality との関係についての記述がみられる。当時、*Globus hystericus* は性関係から引き離された熟女の罹る病気だと考えられた。B. C. 4世紀に、Plato は *Timaeus* の中で子宮を女性の sexuality の源であると考え、欲望を抑えられない好色な動物に例えている。子宮が女性の体内にいる動物であるという考えはやがて否定されたが、性欲と不順な sexuality の連想は発展し続けた。2世紀に、Galen of Pergamon は男性の精液の供給停止が女性の体と神経に影響を与える原因となることを強調した。性行為と不順な sexuality は肉体的現象として捉えられ、彼の理論はその後長く影響を及ぼし続けることになる。ルネサンスの三大医学者の一人であり、Walter が鼻に関するその著作を精読した Ambrois Paré ですら、依然としてギリシャ時代と Galen の考え方をおおむね信じていた。“*Omne animal ex ovo.*”と言った William Harvey も古い子宮論を信じていた一人である。しかしその理論は、不順な sexuality は脳の働きによるという新しい科学的な理論にとって代わられ、17、18世紀の医学は古典的な理論を否定する。Tristram が多くの知識を集めた *The Anatomy of Melancholy* において、Robert Burton は、女性の不順な sexuality が心因的なものであることを示すが、以下のようにも論じる。

... the best and surest remedy of all is to see them well placed, & married to good husbands in due time ... and this ready care, to give them content to their desires.¹⁶

このことは不順な女性の sexuality と性的没交渉が依然として一般人の心の中で強く結びついていることを示している。大陸では18世紀前半に、hysteria は libido に起因するという新しい考え、つまり新しくなった Galen の理論が紹介されている。

Mrs Wadman は Mrs Bridget に Toby の傷の性質を探るように頼み、彼女自身は James Drake, Thomas Warton,¹⁷ Reiner de Graaf の医学書を熟読し、Dr Slop に傷の最新の状態を二度も尋ねている。また彼女は Toby 本人に頻繁に “tender enquiries” (535) をしている。彼女の情報収集活動の中で、鼠蹊部への関心を絵画的に描いている Namur の地図のエピソードを読むと、読者は彼女の関心は Toby の性的能力に他ならないと確信し、その結果妊娠を嫌っていた彼女は性の悦びを求めたのだと考えがちである。

読者が考える彼女のそのような態度は、キリスト教の正統的態度から強く否定されてきた。St Augustine は情欲を媒介にして原罪と sexuality を結び付け、性交を生殖の手段としてのみ認め、性の快楽を悪魔的として激しく非難した。しかし他方俗社会では、妊娠は女性が悦びを感じないかぎり成立しないと信じられていた。そして18世紀、新しい医学は肉体的悦びを妊娠から解き放ち、女性の肉体的悦びは医学的に好ましく道徳的に理に叶っていると考えた。性の手引書は女性の性欲の強さを論じ、女性は積極的に肉体的悦びを求めるのだと主張するようになり、性の快楽自体が様々な人によって自由に論じられた。Tom Jones の Lady Bellaston のように、上流の女性が性の悦びに耽っても、広く行き渡った開放的な sexuality のおかげで名誉を損なうことはなかった。

思想界では性に対して啓蒙的、非啓蒙的な考え方があった。例えば後者は、Adam Smith, Sterne の最も重要なフランスの友人の Denis Diderot, Sterne がパリで *Émile* の初版を買った Rousseau であり、貞節という伝統的な価値を賞賛した。“What would take place of this negative instinct in women, if you rob them of their modesty?”¹⁸ と Rousseau は *Émile* の中で語る。他方 Schiller, Helder をはじめとする自由主義者は、原罪の教義つまり肉体的墮落という概念を拒絶し、人間性を感覚で捉えたままに理解しようとする。彼らは魂の喜びだけでなく肉体的悦びも評価する。啓蒙時代の後期には、Helvetius, St Simon, Fourier などの思想家が性の悦びは人生の

指針であるとすら主張した。

さて愛妾を囲うことは上流階級の男子の間では普通のことであり、その結果庶子は珍しいものではなかった。彼らは正餐後の伝統的な segregation で女性を交えず制限のない会話を楽しむことができた。中流、下層階級では、男女を問わず猥褻な会話が広く聞かれた。Swift は “The Journal of a Modern Lady” で女性の淫らな会話を皮肉っている。ローティーンの子でさえもポルノを読んでいた¹⁹。ポルノは17世紀の中頃大陸で生まれ、すぐにイギリスに伝わり様々な形で出版された。例えば、姦通裁判の報告書、医学や性の手引書、エロ雑誌である。政府も増え続ける猥褻文書を取り締まることはできなかった。新聞や雑誌には多くの性病薬の広告が見られ、街には下層階級向けと上流階級向けの娼婦宿ができ、猥褻なショーをみせる秘密クラブも現われ、Shotgun marriage が教会でしばしば見られた、等々。このようなことから、18世紀社会の性に対する寛大さは甘く、制限がなかったと思われる。しかし、この性文化の中心にいるのは男性であり、全ては男性に都合の良いように作られていることを知らねばならない。

論者は、性の悦びや自身の sexuality を記録した18世紀の女性の日記や書信類を寡聞にして知らないし、また、Bluestockings の誰一人として、それについて制約も偏見もない意見を述べたことはない。18世紀のポルノの繁栄は男性支配の性文化の顕著な表徴であり、その特徴は女性がたいてい主役で男の性欲を刺激することである。愛は性の中で重要視されるようになってくるが、性は決してロマンティックなものではなく、特に夫婦生活においては依然としてしばしば野蛮であった。それは妻にとって結婚上の義務であり、夫が妻を求める時はほとんど拒めなかった。性は両性において悦びであるという当時の仮説は、女性の性液が男性の精液と同じ種類のものであるという迷信の上に作られている。女性は肉体の悦びを感じると信じられていたが、悦びの権利を持つとは考えられていなかった。18世紀は “the dawning of a new era of sensual enjoyment”²⁰ であるという考えに Angus McLaren は大

きな疑問を投げかけているが、18世紀は「男性」の官能的な悦びの新時代の夜明けであると言うべきだろう。ここに私達は、読者にかけられた Sterne の罫に気づかねばならない。Mrs Wadman は成熟した女性であったが、所謂経験を積んだ女性ではない。彼女が好色な女性として快樂を求めているという観念やイメージを捨てなければいけない。Tristram の以下の言葉：

It was just as natural for Mrs Wadman, whose first husband was all his time afflicted with a Sciatica, to wish to know how far from the hip to the groin . . . (528)

は、結婚における普通の結びつきを求めたいという彼女の希望であると理解される。このようなわけで、Mrs Wadman は Toby との再婚に積極的であり、普通の結婚生活を送りたいと真剣に願っている女性と言えるであろう。

IV Toby の sexuality と幼児性

Dr Slop に対する Mrs Shandy の強い嫌悪に関する Walter と Toby の会話は、Toby の女性についての全くの無知の話題に発展する。

—To think, said my father, of a man living to your age, brother, and knowing so little about women!—I know nothing at all about them, —replied my uncle *Toby* . . . —Methinks, brother, replied my father, you might, at least, know so much as the right end of a woman from the wrong. . .

— — — — Right end, — — — quoth my uncle *Toby*, muttering the two words low to himself . . . —Right end of a woman!—I declare, quoth my uncle, I know no more which it is . . . — — and if I was to think, continued my uncle *Toby*, (keeping his eye still fix'd upon the bad joint) this month together, I am sure I should not be able to find it

out. (82-3)

Toby は女性の表と裏、つまり性器の具体的イメージを捉えることができない。性は想像的なものであると同時に経験的なものであり、経験がなければ理解することはできない。“this month together, I am sure I should not be able to find it out” というのは、Toby の童貞の告白に他ならない。

Tristram は Toby と Mrs Wadman の交際を説明する時、*passion* という言葉を二度使う。最初の用例は彼女が哨兵詰所で Toby を誘惑する時の描写に見られる。彼女が図面を少し引き寄せるだけで、“my uncle Toby’s passions were sure to catch fire” (447) だと使われる。もう一つの用例は肉体と魂の関係の Toby の思い違いの説明の中に見られる。お尻とその皮膚の間に染み込む漿液を“a part of the passion” (468) と思い込んでしまったと使っている。最初の用例は包囲戦に向けられる関心の意味であり、二つ目は恋愛感情の進りのことである。Tristram は、Toby の場合には *passion* という言葉を性欲の意味には使っていない。

Walter は Toby が性欲を感じることもあると考えている。彼は仕立屋に Toby の新しいズボンを“a camphorated cerecloth” (374) で作るように注文する。また彼は Mrs Wadman 攻略に向かう Toby に宛てた手紙の中で、性欲を増進する獣や鳥の肉を食わずに、それを抑える野菜類をとるように忠告する。しかし実際はその逆である。Mrs Wadman の指と足による誘惑の間でさえ Toby は生理的興奮をおぼえない。Trim は、思わず性欲を感じたある Beguine 派修道尼との刺激的な肉体接触経験を具体的に説明するが、Toby の反応は、“—And then, thou clapped’st it to thy lips, Trim . . . and madest a speech.” (464) である。彼は修道尼のマッサージで Trim の性欲がかき立てられたことが理解できない。経験無くしては、経験によってのみ得られる感覚を理解することはできない。

Tristram は Toby が水しか飲まぬ男であればと考える。彼の説明による

と、水は人の理性を失わせ体内の各部分を活性化させ、性感覚を刺激する。Tristram は、Toby が医者 の 忠告 を 受けて “quietness sake” (439) の 為 に 水 を 飲んだ 程度 だと 語る。Toby が 性欲 を 持った という の は 極めて 疑わしく、彼は 性 における 個人的 な そして 複雑 な 成長 を 経験 した こと が なく、性的 に 未熟 であり、しかも 性的 成熟 を 拒否 している よう に 思える。

Toby の 人生 と 関心 の 大部分 は 軍務 と 戦争 ゲーム に 占め られて いる。学校 時代、軍隊 の 太鼓 を 聞けば 彼の 心臓 は 高鳴 らず には おれず、戦記 類 に 夢中 に なった。その後、大地主 の 次男 の 例 に もれず 軍隊 で 将校 の 株 を 買った の である。彼は Namur の 包圍戦 で 鼠蹊部 に 重傷 を 負い、彼の 従卒 Trim は Landen の 戦闘 で 膝 に 負傷 し、その 為 二人 は 軍務 に つけ なくなる。Walter と Yorick を 前に して の 戦争 の 弁明 において、Toby は 戦争 の 残酷 さ を 語り、その 悲惨 さ を 考 えている が、戦争 と その 悲惨 は 彼の 心 の 中 で 必ず しも 結び つかない。さらに 彼 が 名誉 と 自由 の ため に 戦う の だと 動機 を 語る 時、戦争 の 最も 残忍 な 側面 は 彼の 心 から 消えて しまい、自身 を “the good and quiet of the world” (497) の 守護者 と して 劇化 して しまう。戦争 の 正当化 に 心 を 奪わ れる 時、戦争 その もの が 悲劇 である こと を 考 える こと が できず、彼の 戦争 の 弁明 は 戦争 の 正当化 に なって しまう。

Toby は、この 弁明 を 戦争 ゲーム に 耽る こと への 弁明 に もあて はめる。包圍戦 に 彼 が 見いだす 楽しみ は “the great ends of our creation” (370)²¹ に 応 えている の だ と 言う。Helene Moglen の 言う よう に、Toby は ゲーム と その 目的 を 混同 して いる²²。実際 の 戦争 と ゲーム の 区別 は 彼の 心 の 中 で 消えて しまい、戦場 における 戦闘 の 知識 は bowling green で の 戦闘 の 知識 と 同じ だと Toby は 言う。実際 と 見せかけ の 区別 の 消失 は 子供 の ごっこ 遊び の 特徴 であり、彼の 戦争 ゲーム は 子供 の ごっこ 遊び と 同じ 性質 の もの である。彼 が それ を 心 から 楽しんで いる という 事実は、Trim が トルコ パイプ から 作 った 模型 の 大砲 の エピソード に 見られる。大砲 に よだれ を 催す Toby は 大切な 玩具 を 手に した 子供 であり、子供 が それ を 独り 占め しよう と する よう に Toby も 大

砲を持って哨兵詰所に入ってしまう。彼の戦争理解は、その残酷さを体験したにもかかわらず不完全であり、戦争ゲームに夢中になる姿は全くの子供である。Toby の性的未熟とこの幼児性から、彼は成熟した Mrs Wadman とは違い未熟な男性であると言える。

V Toby の真摯さ

Tristram は “Of all mortal, and immortal men too . . . my uncle Toby was the worst fitted” (437) と Toby の恋愛への不向きを強調する。²³ しかしその一方で Tristram は、

. . . with regard to my uncle Toby's fitness for the marriage state, nothing was ever better: she [Nature] had formed him of the best and kindest clay . . . (517)

とも強調する。恋に対する不向きと結婚に最適であるという状態は、恋を楽しむことはできるが再婚の機会はほぼないという Mrs Wadman のそれと補完的關係にある。しかし、彼女は結婚に伴う性的な面を考えるが、彼は性の肉体的な面を理解できずに拒否しており、補完し合うどころか、二人には大きな隔りがある。

Trim と修道尼の恋物語に対する Toby の反応は、彼の恋についての子供っぽい、又は全くの無知を示す。Trim は恋が激しい痛みの中で起こったと説明する。“I thought *love* had been a joyous thing” (460) と Toby は告白するが、恋愛経験がないので Trim の説明に異議を唱えられない。3 週間も修道尼と一緒に過ごしても恋を感じなかったと Trim が言う時、Toby は “That was very odd, Trim” (461) と初めて反問するが、“It never did” (462) という Trim の経験に基づく説明は Toby を黙らせてしまう。Mrs Wadman 攻略のために 2 人の間で、

I wish I may but manage it right; said my uncle Toby . . .

—A woman is quite a different thing—said the corporal.

—I suppose so, quoth my uncle Toby. (470)

という会話が繰り返り広げられる。Toby ができることは、恋の先輩である Trim の言葉に従順に従うことである。しかし、彼が Trim の意見を受け入れても、その意味を本当に理解できるかどうかが問題である。以下の二人のやりとりの中で、Toby は Namur の地図のエピソードの時と同じ誤解を繰り返す：

I blush'd when I saw how white a hand she had—I shall never, an' please your honour, behold another hand so white whilst I live—

—Not in that place: said my uncle Toby—

Though it was the most serious despair in nature to the corporal— he could not forbear smiling. (463)

彼の目は、百姓には似つかわしくない若い修道尼の美しい真白な手だけに向けられ、その手を見て顔を赤らめる Trim を見てはいない。彼は恋が肉体的感覚を伴うということを理解できない。彼にとって、求愛は性的基盤を持たない単に精神的なものにすぎない。

Mrs Wadman は Toby との話し合いの中で子供が親に与える悲しみと心痛について意見を述べる。それに対する Toby の素朴で極めて悲現実的な返事の為に彼女は呆れ返る：

I declare, said my uncle Toby, smit with pity, I know of none; unless it be the pleasure which it has pleased God—

—A fiddlestick! quoth she. (526)

彼にとって子供を得ることのマイナス面など問題外なのであり、それは神を

喜ばせることに他ならない。生殖という地上的な問題は彼の心の中で直接に天上の喜びに結びつき、生殖という極めて肉体的な問題は精神感情に純化されるのである。

彼の結婚の喜びに対する考えは極めて精神的である為、鼠蹊部に受けた傷について事細かに尋ねる Mrs Wadman の意図を彼は理解できない。その結果彼は、彼女の質問の内に “the compassionate turn and singular humanity of her character” (535) を見てしまい、それを彼女の最高の美德として賛美する。彼が Mrs Wadman に求めるものは高尚な個人相互の関係であり、精神的な結婚相手を求めているのである。

Walter は妻に “one of his second beds of justice” (378) の中で、Toby が結婚すると、

—Then he will never . . . be able to lie *diagonally* in his bed again as long as he lives. (378)

と話す。Mrs Shany は夫の言葉の意味がわからず、理解しようとしめない。Toby もその意味を理解することはできないだろう。ベッドは結婚の絆の象徴に他ならない。私達は彼の心の中に性に基盤を置く夫婦生活という概念を見いだすことはできない。だから、結婚が必然的に生みだす性の現実の問題に彼が直面する時、彼は Mrs Wadman に対する包圍網を解いて自分の精神内に撤収せざるを得ない。傷に関する Mrs Wadman の質問の性的な目的を Trim が明らかにする時、彼の即座のそして穏やかな反応は精神的、連带的結婚の理想における彼の失望の深さを示している。

My uncle Toby gave a long whistle—but in a note which could scarce be heard across the table . . .

My uncle Toby laid down his pipe as gently upon the fender, as if it had been spun from the unravellings of a spider’s web— (536)

その後、彼はもう二度と女性のことは考えまいと決心する。彼は自己の精神世界に閉じ籠り、二度と性に基づく世界には打って出ようとせず、自分の純粹に理想化された sexuality に誠実であったと言える。

VI 結 論

Toby の唯一の過ちは、余りにも簡単に Mrs Wadman と結婚しようとしたことである。彼は結婚の話題が理解を越えていると分かった時、以下のように応待する。

... he laid his hand upon his heart, and made an offer to take them as they [the pains or pleasures of matrimony] were, and share them along with her. (527)

ここで彼は結婚が課すあらゆる問題をウェディングベルが解決し、彼女は自分と同じ世界に住み、同じ理想を分かちあうと思いつく。この過ちは肉体の世界の現実を拒否する彼が、現実と理想を混同する時におきる。

Mrs Wadman は肉体の世界に信を置き、他方 Toby は精神世界に信を置く。私達は2人の間に共通の基盤を見いだすことはできない。性における心と体の問題は、神学、哲学、道徳の重要な問題の一つであり、Sterne はそれを取り上げ、Toby と Mrs Wadman の関係に織り込んだのである。彼は二人に決して両立することのない性質を与え、夫々の sexuality の理想を求めさせることにより、できるかぎり二人を離れ離れにさせようとする。死に臨んで、Sterne は Mrs Daniel Draper (Eliza) に何通かの興味深い手紙を書いている。彼はその時結核のために死ぬ間際であったが、燃え立つ心は情熱的で次のように書き綴る。

—Not Swift so loved his Stella, Scarron his Maintenon, or Waller his Sacharissa, as I will love, and sing thee, my wife elect!²⁴

また

... sitting most dejectedly at the Table with my Eliza's Picture before me—sympathizing & soothing me—O my Bramine! my Friend! my—〈future Wife!〉 Help-mate!²⁵

しかし私達は、彼の情熱が彼の肉体とは無縁のものであることを知っている。医者が性病であると診断を下した“the worst part”²⁶の痛みに苦しみながら Sterne は、

—'tis impossible. at [sic] least to be that . . . for I have had no commerce whatever with the Sex—not even with my wife . . . these 15 Years.²⁷

と記している。Toby は晩年の彼の似姿のように思われる。彼は自身の決して幸福とはいえない結婚生活からその難しさと、そして性における心と体の調和の取れた関係の難しさをもよく知っていたに違いない。Toby と Mrs Wadman の sexuality の全く正反対の衝動は、シャンディ流の皮肉の一つであり、読者の sexuality と共感に対する Sterne の挑戦であるといえよう。

注

- 1 本稿は第62回日本英文学会全国大会（岡山大学、1990年5月）に於て口頭発表したものに加筆修正をほどこしたものである。
- 2 Theodore Baird, 'The Time-scheme of *Tristram Shandy* and a Source', *PMLA* 51 (1936)
- 3 Laurence Sterne, *The Life and Opinion of Tristram Shandy, Gentleman*, ed. Ian Campbell Ross, (Oxford: Oxford U. P., 1983). 引用は全てこの版からなされ、引用箇所のパージは本文中に括弧の中に示される。
- 4 未亡人の再婚は夫側の家族から財産を引き出してしまうことがあった。
- 5 本稿に於ては、エリートとは上流階級と専門職階級を指す。

- 6 R. Schofield and E.A. Wrigley, 'Remarriage Intervals and the Effect of Marriage Order on Fertility', *Marriage and Remarriage in Populations of the Past*, eds. J. Dupâquier et. al., (London: Academic Press, 1981), p. 221.
- 7 本文中では, "an armistice . . . of almost eleven years" (442-3) となっているが, 12年が正しい.
- 8 ここで私達は彼の求愛が18世紀のモラリストによって女性に推奨された求愛のモデルに従わされていることを知る.
- 9 Ruth Perry, 'The veil of chastity; Mary Astell's feminism', *Sexuality in Eighteenth-Century Britain*, ed. Paul-Gabriel Bouc e, (Manchester: Manchester U. P., 1982), p. 147.
- 10 Michael W. Flinn, *The European Demographic System 1500-1820* (Brighton: Harvester, 1981), p. 84 [Table 6.4].
- 11 Laurence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1977), p. 63.
- 12 Stone, *The Family, Sex and Marriage*, 47 [Graph 3].
- 13 Alice Browne, *The Eighteenth Century Feminist Mind* (Brighton: Harvester, 1987), p. 24.
- 14 Angus McLaren, 'The pleasures of procreation: traditional and biomedical theories of conception', *William Hunter and the Eighteenth-Century Medical World*, eds. W. F. Bynum and Roy Porter (Cambridge: Cambridge U. P., 1985), p. 330.
- 15 I Corinthians, 7, 1.
- 16 Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy*, eds. Floyd Dell and Paul Jordan-Smith, (New York: Tudor, 1927), p. 355.
- 17 Mrs Wadman は脳に関する Warton の医学書を読んでいる。このことからすると、Sterne は性が心の中に起きるものであることを知っていたように思われる。18世紀の後半までは, "the imagination was created with certain mechanical powers, but it was not considered the agent of sexual aberrations" (G. S. Rousseau, 'Nymphomania, Bieville and the rise of erotic sensibility,' *Sexuality in Eighteenth-Century Britain*, p. 147) と言われている。
- 18 Jean Jacques Rousseau, * mile* (London: Dent, 1950), p. 322.
- 19 David Foxon, *Libertine Literature in England 1660-1745* (New York: University Books, 1965), p. 6.
- 20 McLaren, 'The pleasures of procreation', p. 339.
- 21 Toby は他の箇所でも Trim に, "as the knowledge of arms tends so apparently to the good and quiet of the world—and particularly that branch of it which we

have practised together in our bowling-green, has no object but to shorten the strides of AMBITION, and intrench the lives and fortunes of the *few*, from the plunderings of the *many*" (497) と言っている。

- 22 Helene Moglen, *The Philosophical Irony of Laurence Sterne* (Gainesville: The Univ. Press of Florida, 1975), p. 84.
- 23 Tristram は他の箇所でも Toby の愛についての無知を語る, "LOVE moreover of all others being a subject of which he was the least a master" (525).
- 24 Laurence Sterne, *Letters of Laurence Sterne*, ed. L. P. Curtis, (Oxford: Oxford U. P., 1967), p. 319.
- 25 Sterne, *Letters*, 323.
- 26 Sterne, *Letters*, 329.
- 27 Sterne, *Letters*, 329.